## B12a　地の利を生かした岡山理科大学における取組み

○田辺 健茲 (岡山理科大・総合情報)

岡山県の南部（岡山市を含む）は晴天率ならびに seeing の両面で、日本で最も天文観測に適した地域であるといわれている。筆者は 1986 年から岡山市に在住しているが、この地理的好条件をいかに生かすかを模索し、さまざまな試みの結果、多少の成果も上げることができるようになったので、その経過、現状、さらには将来像について述べてみたい。

主たる研究対象は連星、変光星である。1989 年以来、我々は国立天文台岡山観測所の 91 ｃｍ望遠鏡に取り付けられた光電測光器、その後は偏光撮像装置（通称 OOPS）のユーザーとして激変星（特に nova-like と old novae）の観測を行った。光電測光器時代、協同観測者はハイレベルのアマチュアとして著名な地元の高校教員の方々であった。（その協力関係の成果の一つが美星天文台建設である。）OOPS に替わってからは筆者の研究室の意欲ある学生が戦力になった。その経験から筆者は自前の観測室を持つ意義を認識し、1997 年には口径 30 ｃｍのカセグレイン望遠鏡を有する観測室（VSNET Okayama Station）が岡山市芳賀に完成した。さらに岡山理科大学 21 号館屋上に 1998 年、そして 2002 年には 2 つ目の観測室が立ち上がり、学生たちとともに晴れたら毎夜、激変星の高速（連続）CCD 測光観測を行っている。それとともにデータは AIP4Win というソフトで処理されて翌日には光度曲線が得られている。今後、処理ソフトとしては目下テスト中の MIRA に移行し、IRAF も含めて 3 種類が使える環境になる見込みである。当研究室は、2 年前に大学院修士課程が、今年からは博士課程が設置されたので、社会人大学院生として県内のハイレベル・アマチュアを受け入れる体制ができた。今までになかった形のアマ・プロ協力体制ができるものと考えられる。